

2014

決

定

第18回

国際開発研究大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

一般財団法人 国際開発機構 FASiD

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、1997年に創設されました。

第18回(2014年度)の受賞作品が下記の通り決定しましたのでご紹介します。



柳澤 悠 著

『現代インド経済—発展の淵源・軌跡・展望』

(名古屋大学出版会) 2014年

これまでの受賞作品

- 第1回 廣瀬昌平・若月利之編著『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会 1997年
原 洋之介著『開発経済論』岩波書店 1996年
- 第2回 絵所秀紀著『開発の政治経済学』日本評論社 1997年
深川由起子著『韓国・先進国経済論—成熟過程のミクロ分析—』日本経済新聞社 1997年
- 第3回 中兼和津次著『中国経済発展論』有斐閣 1999年
辻村英之著『南部アフリカの農村協同組合—構造調整政策下における役割と育成—』日本経済評論社 1999年
- 第4回 峯 陽一著『現代アフリカと開発経済学 市場経済の荒波のなかで』日本評論社 1999年
- 第5回 黒崎 卓著『開発のミクロ経済学』岩波書店 2001年
西川 潤著『人間のための経済学—開発と貧困を考える』岩波書店 2001年
- 第6回 石井正子著『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店 2002年
脇村孝平著『飢饉・疫病・植民地統治—開発の中の英領インド』名古屋大学出版会 2002年
- 第7回 平野克己著『図説アフリカ経済』日本評論社 2002年
- 第8回 石井菜穂子著『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社 2003年
安原 毅著『メキシコ経済の金融不安定性』新評論 2003年
- 第9回 藤田幸一著『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動：貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会 2005年
- 第10回 谷 正和著『村の暮らしと砒素汚染—バングラデシュの農村から』九州大学出版会 2005年
- 第11回 湖中真哉著『牧畜二重経済の人類学—ケニア・サンプルの民族誌的研究』世界思想社 2006年
- 第12回 牧田りえ著『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』The University Press Limited 2007年
- 第13回 武内進一著『現代アフリカの紛争と国家—ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店 2009年
- 第14回 田辺明生著『カーストと平等性—インド社会の歴史人類学』東京大学出版会 2010年
- 第15回 該当作なし
- 第16回 佐藤百合著『経済大国インドネシア—21世紀の成長条件』中央公論新社 2011年
- 第17回 森 壮也・山形辰史著『障害と開発の実証分析—社会モデルの観点から』勁草書房 2013年
山尾 大著『紛争と国家建設—戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』明石書店 2013年

審査委員選評

中国と並んでこれからの世界経済をリードすると期待されているインド経済の成長の軌跡を、イギリス植民地期の19世紀末にまで遡って描き出すという、まことに気宇壮大で骨太な研究書である。本書は、独立前と後との経済の連続と断絶を描き出した、我が国では初めての著作である。長年にわたるフィールドワークと膨大な文献探索によって裏打ちされている。著者の主張は序章で10点にわたって整理されているが、とりわけ強調されている点は、「歴史的な変化の累積の帰結」として現代インドの経済と社会を理解するという歴史的アプローチの重要性であり、インド経済の全体像は「農村社会の二層性」によって規制されるという「構造的な特徴」をもっていることの指摘である。「農村社会の二層性」とは「農村の下層」と「農村の上層」の二層性を指す。著者は、19世紀末から始まった「農村社会の下層階層の上層階層への抵抗や自立化の動きを通して実現された、ハイアラーキー関係の弱化」によって「農村市場が拡大」し、ついには現在の高度経済成長を市場面から支えるまでになった、と説明している。インド経済の発展経路の特徴を「下からの発展」、「農村需要が果たした中心的な役割」、「19世紀末以来の農民階層による農業生産性上昇を目指した経験によって支えられた、独立以降の農業生産の発展（緑の革命）」、そして「独立以降の国家主導の輸入代替工業化」に求めたものである。「下からの発展」という農村下層民の自立化への主体的営為を重視する著者のアプローチを現代インド経済にまで拡張し、縦横無尽に議論を展開した渾身の著作である。

選考委員の間からは、本書で著者が示した経済発展の経路は発展の糸口が見えない発展途上国にとって一つの明るい指針を示す、学問の醍醐味を感じることでできる著作、インド市場の特徴を分析した貴重な研究、等々といった高い評価を得たことも付け加えておきたい。
(法政大学教授 絵所 秀紀)

受賞者の言葉

この度は、思いもかけず国際開発研究大来賞を賜り、非常に光栄に思っております。国際開発機構(FASID)の皆様や審査委員の皆様、心から感謝申し上げます。

私は、長い間、インドの経済史を主たる研究分野としてきました。しかし、現代インドへの関心は、1979年～81年に南インドの一農村を延べ一年かけて調査してから、ずっともっていました。調査が行われた時点は「緑の革命」が進行する最中で、灌漑用ポンプが設置されて、バナナやサトウキビの栽培が拡大し、農業が大きく変化しつつありました。同時に印象深かったことは、それまで社会の底辺にいた指定カースト(被差別カースト)など下層の人々が、組合を作って運動することなどを通じて、大きくエンパワーされていたことでした。こうして、インド農村社会のダイナミズムに、強く印象づけられました。インドの経済は、その後、年率5%を超える成長を遂げていきます。私の心の中では、この経済成長を支えた重要な要因の一つは、人口の7割前後が住む農村の経済と社会のダイナミズムでないか、という思いが次第に募ってきました。

この印象は、同じ村落を2007年に再調査をした時に、一層強まりました。灌漑用ポンプの数は格段に増え、農業機械の導入の程度も格段に進んでいました。28年前には、ほとんどが泥壁でバナナの葉っぱで葺いた家であった指定カーストの人々の通りは、そのほとんどが小さいながらも煉瓦やコンクリートの家に建て替えられていました。テレビや扇風機など耐久消費財の普及率も全体として高く、かなり高価なバイクでさえも、指定カースト世帯の15%程度がもっています。

インドの経済成長というと、IT産業や都市中間層に注目が集まります。しかし、貧しく遅れているとしばしばみなされてきた農村社会のこうしたダイナミックな変化を十分考慮しなくては、現代インドの経済は十分な説明ができないのではないか、という思いは非常に強くなりました。これが、本書を書く上でもった重要な動機です。

経済史研究の分野では、私は近年、第一次大戦以降の小・零細規模工業の発展に注目し、その発展を人々の消費生活や消費嗜好の変化との関係で分析してきました。独立前にすでにインドではメリヤス産業が発展しますが、この産業では大規模な綿工場による兼営のメリヤス生産があるにもかかわらず、小・零細規模の工場が叢生して、メリヤス市場のシェアの多くをとって、産業発展をリードしてゆきます。それが可能だったのは、小・零細企業が、貧困層でも買える安い価格で、彼らの消費嗜好に見合った製品を大工場以上に適合的に作ることができたからでないか、と考えました。こうした、小・零細企業群が、大規模工業の発展にもかかわらずそれと競争して発展してゆく姿は、現代のインドのインフォーマル部門の発展と非常に似ているのではないか、という思いが非常に強くなりました。遅れた産業部門とみられてきたインフォーマル産業のダイナミズムを見落とすことなく、現代インドを理解したい、というのも、本書を書く重要な要因でした。

本書の意図が、成功しているかどうかはわかりませんが、現代インド経済の考察に少しでも新たな視点をつけくわえられていれば、著者としては存外の幸せです。

柳澤 悠



YANAGISAWA Haruka

1967年東京大学経済学部卒業、1972年東京大学大学院経済学研究科博士課程中退、1993年東京大学より博士(経済学)学位授与。横浜市立大学助教授、東京大学東洋文化研究所教授(1983-2004年)、千葉大学法経学部教授(2004-2010年)を経て、東京大学名誉教授・東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター研究員。1944年生まれ。

主要著書

『南インド社会経済史研究』(東京大学出版会、1991年)、*A Century of Change: Caste and Irrigated Lands in Tamilnadu, 1860s-1970s* (Manohar, Delhi, 1996)、*Local Agrarian Societies in Colonial India: Japanese Perspectives* (co-edited, Curzon Press, Surrey, 1996)、『現代南アジア4 開発と環境』(編著、東京大学出版会、2002年)、*Towards a History of Consumption in South Asia* (Oxford University Press, New, Delhi, 2010)、『激動のインド4 農業・農村』(編著、日本経済評論社、2014年)他

第18回応募作品の傾向と選考経緯

2013年4月から2014年3月までに出版された国際開発分野における課題を主たるテーマとした日本語の研究図書を対象として公募したところ61作品の推薦・応募があった。

本年度応募作品の特徴は、アジアは例年通り多く20点、うちインド3点、インドネシア4点であった。アフリカは7点、中東が例年より多く6点、中南米・大洋州を取り上げた作品が各1点あった。

分野も応募作品の増加に伴い多岐にわたり、開発一般19点、災害/防災/難民7点、社会開発9点、ビジネス/BOP・CSRが6点、環境/資源、政治、都市計画/移民が各2～3点であった。福祉、保健・医療、教育は本年はなかった。FASID国際開発研究センターにおいて予備審査を行い、受賞作品に加えて下記5点が最終審査対象として選出された。(書名五十音順)

末近 浩太 著	『イスラーム主義と中東政治—レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』 名古屋大学出版会
佐久間 寛 著	『ガーロコイレ—ニジュール西部農村社会をめぐるモラルと叛乱の民族誌』 平凡社
加藤 博・岩崎えり奈 著	『現代アラブ社会—「アラブの春」とエジプト革命』 東洋経済新報社
小泉 康一 著	『国際強制移動とグローバル・ガバナンス』 御茶の水書房
渡辺 昭一 編著	『コロンボ・プラン—戦後アジア国際秩序の形成』 法政大学出版局

審査過程において審査委員から出された意見はおおよそ以下のとおりである。

『イスラーム主義と中東政治』は、急進的なイスラム原理主義組織とのイメージが定着しているヒズブッラーが、基本理念を維持しつつも、社会・市民との接点を含め、自らを新たな政治環境に適応させながら危機を乗り越えてきたという視点は、定説を超える斬新性がある。今日の国際社会において頑迷、偏狭、急進的な存在としてネガティブなイメージの強いイスラーム主義組織が、より柔軟に変革する可能性(希望)を示唆した点は前向きに受けとめたい。

『ガーロコイレ』は、ニジュールの農村開発・土地係争・地域権力・協同組合等について、過去の歴史研究のレビューを含め、豊富な知見が散りばめられている。援助プロジェクトを企画・実施する際に、こうした点への留意は重要と思われる。事前の理論・仮説にとらわれず、フィールドワークで経験した現実を基点として、文化人類学的手法で事後に考察を深めていく手法も新しい。伝統的土地所有制度と近代的土地所有制度のズレを指摘した点等について、評価できる。

『現代アラブ社会』は、4回におよぶエジプト国民に対する意識調査に基づく動向分析を行っている点が斬新であり評価できる。かかる分析に基づいて執筆された書籍は珍しく学術的価値は高い。第一部「アラブの春」の歴史的背景は、混迷・複雑化する中東情勢を理解するうえで非常に有用である。

『国際強制移動とグローバル・ガバナンス』は、UNHCRの役割と限界を含めて具体的に論じており、国際強制移動という今日的課題に対するグローバル・ガバナンスのあり方について有用な問題提起をしている。著者がUNHCR元職員であるため現実的な視点からの分析となっている。難民をテーマとした既存研究は人道支援の観点が多いが、本研究は難民支援を超えた視点で分析している点に意義がある。

『コロンボ・プラン』は、日本のODAの原点とされながら必ずしも詳細が知られていないコロンボ・プランに焦点をあてている。アジア地域における政治的独立、イギリスからアメリカへのヘゲモニーの転換、冷戦の進行という枠組みでの形成と変容を明らかにした点が評価できる。本著は戦後アジア国際秩序の形成研究のひとつとして貴重な成果であり、援助に関心を持つ者の間では必読文献の一つとなる。

第18回(2014年度)審査委員会

委員長	杉下 恒夫 (FASID 理事長)
委員	荒木 光弥 (株式会社国際開発ジャーナル社代表取締役・主幹)
	絵所 秀紀 (法政大学教授)
	大来 洋一 (政策研究大学院大学名誉教授)
	大野 泉 (政策研究大学院大学教授)
	岡田 尚美 (FASID 専務理事)

表彰式および記念講演会

案内状

http://www.fasid.or.jp/award_detail/3_index_detail.shtml

日 時	2015年1月30日(金) 13:30～15:30
講 演	「現代インド経済への新たな視角：農村社会・インフォーマル部門・技術集約型産業」 柳澤 悠
会 場	FASID セミナールーム (東京都港区麻布台2-4-5 メソニック 39MT ビル 6F)
	地図 http://www.fasid.or.jp/about/8_index_detail.shtml
参加費	無料 (要申込・座席定員制) ※表彰式・記念講演に続いて、懇談会を同会場で開催します。
申込み先	e-mail: okita@fasid.or.jp ※お名前・ふりがな、ご所属、電話番号(昼間連絡できる先)をe-mailにてお送りください。

国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

受賞候補作品 募集のご案内

一般財団法人 国際開発機構 FASiD

「国際開発研究大来賞」は、国際開発の分野における研究奨励と促進、良書の発掘に資するため、国際開発の様々な課題に関する優れた指針を示す研究図書を顕彰するものです。第19回(2015年度)についても、みなさまからのご推薦・ご応募をお待ちしております。

対象となる作品

- (1) 開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとする日本語の研究図書(翻訳、随筆、エッセイ、体験記、自伝、紀行文、事業報告書などを除く)であって、国際開発の実践活動の向上に資するもののうち、特に斬新性、普及性の点で顕著な業績、貢献が認められるもの。
- (2) 個人、又は団体が編者あるいは著作者の場合は、個人の執筆者名が明記されているもの。
- (3) 2014年4月1日から2015年3月31日までの間に初版が国内で市販されたもの。

大来 佐武郎 氏略歴

おおきた さぶろう 1914年旧満州大連市に生まれる。1937年東京帝国大学工学部卒業、逓信省入省。戦後は経済安定本部、経済企画庁においてエコノミストとして活躍。1963年に同庁総合開発局長退官、1964年日本経済研究センター理事長就任、南北問題や開発援助分野で活躍。国際開発計画委員会(ティンバーゲン委員会・ピアソン委員会)の委員や『成長の限界』を刊行したローマクラブのメンバーを務める。1971年国際開発センター理事長、1973年海外経済協力基金総裁などを歴任し、1979年の大平政権において外務大臣を務める(～80年)。その後も国際大学学長、対外経済問題諮問委員会座長、FASiD初代評議員会会長、国際開発学会会長等、国際開発分野で数多くの足跡を残す。1993年逝去。

審査・表彰

表彰 審査委員会で選考された作品に対し正賞(楯)と副賞(50万円)を贈呈します。

審査 当財団国際開発研究センターによる予備審査を経て、審査委員会が行います。

推薦者(自薦・他薦可)は所定の応募用紙へ入力し、e-mail添付により下記の事務局へ送信とともに、当該図書2冊を添えてご応募ください。なお、応募書類・当該図書は返却致しませんのであらかじめご了承ください。

応募用紙 ウェブサイトからダウンロードしてください。
http://www.fasid.or.jp/award_detail/2_index_detail.shtml

締切 2015年5月20日(水)

受賞作品の発表と表彰式

2015年11月に推薦者へ通知、発表し、表彰式(2016年1月)を行います。(予定)